

## 第２回 岩木川魚がすみやすい川づくり検討委員会

日 時：平成 26 年 1 月 23 日（木） 15:10～16:55  
 場 所：青森河川国道事務所 2 階大会議室  
 委 員：東 委員長 (弘前大学農学生命科学部 准教授)  
 泉 委員 (弘前大学農学生命科学部 教授)  
 南 委員 (八戸工業高等専門学校建設環境工学科 教授)  
 棟方 委員 (小野委員代理) (岩木川漁業協同組合 代表理事組合長)  
 工藤 委員 (弘前市上下水道部長)  
 盛谷 委員 (東北地方整備局 青森河川国道事務所長)  
 山谷 委員 (東北地方整備局 津軽ダム工事事務所長)  
 【欠席】  
 蛭名 委員 (青森県産業技術センター内水面研究所 調査研究部長)

### ～ 議事要旨 ～

#### ①現在の課題について

##### (1) 弘前市上水道取水堰周辺における遡上環境

- ・河川水辺の国勢調査の結果から、アユとトウヨシノボリの取水堰上流の個体数が、平成 19 年以降に、急激に少なくなっているため、平成 14 年から平成 19 年の間に変化があったと読み取れる。
- ・左岸側のラバーを 1 本倒すと、残りのラバーから越流しなくなり、魚が鳥に食べられている。
- ・ヒレカットした放流アユが、ゲート下に溜まっている。
- ・10 年前からの調査結果から、魚道本体は機能しているが、魚道入り口に、堆砂や樹林化で魚が、うまく寄れなくなっているため、魚道の方に流路をつける工事を行うと良い。
- ・魚道の上流は、問題がないので、下流が問題である。

##### (2) アユの産卵床を含む瀬・淵の再生・保全

- ・新鳴瀬橋下流の無次元掃流力の経年的な低下は、河道掘削が効いている感じである。
- ・低水路の固定化と樹林化は、直轄区間の上流でも見られる様に感じている。
- ・直轄区間上流の相馬川等の支川からも土砂が大分入ってきており、本川で堆積しており、直轄区間にも影響している。

#### ②弘前市上水道取水堰周辺における遡上環境の改善策に関して

- ・岩木茜橋右岸の魚道迷入ブロックは、魚にとって入りたくないくらい狭くしないと、多分意味がない
- ・弘前市では、ラバーを 3 本立てると、空気厚の関係で、右岸側のラバーが低くなるため、水量が多くなって右岸側に魚が集まる調査結果があるため、魚道側のラバーの空気厚を低めにし、起立高を下げる取り組みを去年から行っている。
- ・下流河道の現状を変えるには、人為的な改善が必要であるが、その後の運用で、魚道側に水量を安定させるラバーの調整ができる可能性がある。

- ・護床工下流の砂州が形成される要因を、検討しなくてはならないが、運用面で調整できるのではないかな。
- ・魚道入り口のブロックの段差を解消させることが、非常に重要なポイントになる。運用で、魚道側に水量を安定できれば、遡上環境は改善される。
- ・魚道入り口のブロックの段差は、ブロックを取ってみて、状況を確認して見てから、段差解消を行わないと難しい。河床との段差解消に、魚道ブロックを使うなどのアイデアを入れた方が良い。
- ・魚道下流の護岸ブロックのところから、伏流水が流れており、水が澄んでいる。冬は、水温が高くなるので、サケの産卵場となるかもしれない。工事には、留意してもらいたい。
- ・改善策は、最終形はまだ詰める必要があるが、基本的な方針としては良い。

### ③アユの産卵床を含む瀬・淵の再生・保全対策に関して

- ・砂州の切り下げ箇所は、具体的に実施箇所があるのか。
- ・樹林化が進行している区間で考えている。中州と限らず、寄り州も含めて考える。
- ・自然再生で、砂州の切り下げの事例があるので、モニタリング結果があれば整理をした方が良い。
- ・瀬・淵の再生・保全は、技術的に難しく、どの段階で踏み切るかのタイミングも難しい。完璧なところまでには、すごく時間がかかる。
- ・再生・保全対策の基本的な方針としては良い。

### ④魚がすみやすい川づくりに関して

- ・魚がすみやすい川づくりは、当面の目標として、「取水堰の遡上環境の改善」と「瀬・淵の再生・保全」を進めて行くこととする。

以上